
エントランス -続・ラウンジ-

久世はるや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エントランス - 続・ラウンジ -

【Nコード】

N4276Q

【作者名】

久世はるや

【あらすじ】

ラウンジ続き。

先輩、旅立つ。

「どうしてですか」

僕は、先輩を責めた。

ここは先輩の住むアパートのエントランス。彼女は大きなスーツケースを転がして、マフラーを首に巻きつけながら出てきたところを僕につかまった。

さすがの彼女もびっくりしたらしい。もともと大きな目をさらに大きく見開いて、ひとつふたつとまばたきをする。対する僕は、彼女をしっかりと見て――いや、ほとんど睨んでいた。マフラーの端がふわりと舞い上がった。

僕がなおも視線を外さずにいると、先輩はやがて、

「なーんではれちゃったかなあ」

そう言っ、あっけらかんと笑った。

「絶対ばれないと思ったのに。ねえ、なんで？」

「そりゃ、学校全体で一人しか枠のないプログラムに受かってれば判りますよ」

「あー、そういうことか。ていうかよくチェックしてたね、そんなん」

「僕もあの枠、来年もらおうと思ってるので」

「優秀だねえ、感心感心！」

……遠まわしに自画自賛したことに気づいているのだろうか、この人は。

毒気を抜かれそうになりながらも、僕はまだ食い下がる。

「それはいいんです。どうして、僕に黙ってたんですか」
「だって、言ったら行きたくなくなっちゃうもん」

先輩はそう言って、子どものように頬をふくらませた。

対する僕は、少し混乱する。

「なんで……僕が引き留めるとでも思ったんですか？　僕は絶対に貴女を応援して」

「だからだよ。『すごいじゃないですか、ぜひ行ってきてください！　僕、応援しますから』とか言って、寂しい目するんですよ」

「……………」

「あたし、言葉より目つきのが堪えるタイプなんだよね」

先輩は、今度はきまり悪そうにほほ笑むと、スニーカーをその場に置いたまま僕のほうへ向かってきた。

不覚にもどきりとする僕の顔を至近距離から見上げて、冷えた指先で眉間をちゃんと突ついてくる。

「ほーら、そうやってシケた顔する！」

「……だっ、て」

「あっあーあー、泣かないでよ。泣いたら10倍の音量で泣き返してやるから」

「……泣きませんよ」

僕は気合いで涙をひっこませ、先輩の圧力に屈して、にこりと笑って見せた。

意地の悪い笑いになっている気がする、けど、まあ良いか。

「メール、ください」

「うん」

「頑張ってください」

「うん」

「待ってます」

「うん」

「好きですよ」

「……うん」

そうして旅立っていった彼女は、果たして一週間後、LAXのエントランスでホストファミリーと並んだ写真が同封されたエア・メールを送って寄越した。

” See you soon , my honey ! ”

（後書き）

あとがきはマイルール違反なのですがあまりにもわかりにくいと思
ったので…

先輩は意外とこれで優秀な方で、学校のプログラムに受かり留学す
ることとなりました、というお話です。こっそり発って着いてから
エメールしようとしてたのに、と。電子メールではないところが
ミソです笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4276q/>

エントランス -続・ラウンジ-

2011年10月8日12時05分発行